

もそれにつれて變革を迫られているといってよいであろう。日本印度學佛教學會もまた、決して従來のままでよい筈はない。21世紀に向けて、新しい研究動向が生まれることが望まれている。留學生諸君からの厳しい、しかも建設的・未來志向的な、多くの批判や提言を期待したい。そしてそれが、日韓間の學術文化の交流のよりよき發展に寄與するものと確信している。

1994年 3月 27日

日本印度學佛教學會  
理事長 前田專學

## 『日本の印度哲學・佛教學研究 —その歴史と現況—』の出版を祝う

韓國から日本に留學して、インド學、佛教學を學んでいる若手の研究者が中心になって、論文集を出されると言う。

書名を教えられ、論題を見せて頂いて、あらためて感銘を深くしている。

通常、論文集というと、各研究者がそれぞれの専門の論考を集めたものである。しかし、本書は特定の問題意識のもとに編纂されており、それぞれの論文は互いに連關して、本書の主張を明確なものとしている。すなわち、本書はインド哲學、インド大乘佛教、テーラヴァーダ佛教から、中國、日本における佛教研究のそれぞれの分野に関する研究史なのである。

日本における研究が主體となっていることは、日本に留學された方が中心になって執筆されているので當然であるが、しかし、日本のこの分野でのレベルは高い。したがって、これは世界における印度學、佛教學のアップ・トゥー・デイトな研究史といっても良い。學會の關心と動向、レベル、現在の研究のポイント、等が俯觀され、これ自體が研究者たちにとってどれほど有益なものであるか、はかり知れないものであろう。同時に本書は後輩の研究者たちにとっても、まことに有益な指針となるものである。

日本は曾て朝鮮民族（および他のアジア諸國民）に皇民化政策とか創氏改名、日本語の強要、強制的な神社禮拜等を押しつけた。最近、私の所屬する曹洞宗教團は教團としての戦争責任を認め、正式の手續きを経て謝罪した。こうした過去を乗り越えて、日韓兩國の親善と友好が發展することを私は切に願っているが、本書はその意味からも、學問の世界での交流を一步進めるものである。日韓兩國の印度學、佛教學が互いに切磋琢磨しな

から、さらに發展することを願ひ、本書がそのための大きな貢獻であることを讃え、その出版を慶祝したい。

一九九四年 三月 十日

駒澤大學佛教學部教授

奈良康明

## 本書の發刊に寄せて

日本におけるインド哲學・佛教學の研究は、明治以降、ヨーロッパのアジア學(インド學・中國學等)を導入することによって近代化されたと言つてよい。また、それに對應して、高等教育機關として、國立大學の「印度哲學科」、私立大學の「佛教學科」等が創設され、徐々に整備されていった。そこでは、日本の佛敎的文化あるいは佛敎界を背景として、アジア諸地域にわたる佛敎についての研究者、ヴェーダーンタ哲學を中心とするインドの哲學についての研究者が、多數養成され、多くの研究成果を生んできた。この間、日本の研究者は、自己の文化的・宗教的なアイデンティティーを追求しながら、同時に、ヨーロッパのアジア學の方法を參考にして、佛敎とインドの哲學・宗教思想に關して客觀的な認識を獲得することに努力してきた。

ところで、周知のように、インドに發生した佛敎は、日本のみならず、それが傳播されたアジア諸地域において、重要な文化的ファクターとなっている。そして、それについての認識は、近現代の日本においても一樣ではなかつた。當初はインドの佛敎、東アジアの佛敎といえども、日本佛敎の立場から、どちらかと言えば、主觀的な研究がなされがちであつた。それに對して、インドの佛敎をインドの歴史のなかに置き、また東アジアの佛敎をその歴史のなかに置いて客觀的に、換言すれば地域研究の方法を加味して、研究するようになったのは、日本における佛敎研究の長い過程において、そう古いことではない。この点は、インドの哲學・宗教思想の研究に關しても共通して指摘できるであろう。

日本の研究者が歐米の研究者よりも有利な点は、中國語資料を比較的容易に利用できることである。この利点が逆に作用したと見ることもできる。日本におけるこの分野の研究の歴史のなかには、誇るべき研究成果も多い。